

イスラエル紀行

丸山 直起

今年の6月国際会議のため久しぶりにイスラエルを訪れた。数えてみるとイスラエル訪問は今度で5度目である。今回の滞在はわずか1週間と短く、訪問先も会議が開催されたハイファとテルアビブだけであったが、いまや何かと話題に事欠かないイスラエルのこと、見聞したままの印象を記してみたい。

テルアビブ行きの飛行機はガラガラ、逆にテルアビブ発は満席だった。つまり、この時期にイスラエルへ出かける観光客がほとんどいないということであり、イスラエルから一時的に脱出しようとするイスラエル人がかなりの数に上っているということである。ミレニウムを当て込んで建設された聖地のホテルはどこも閑古鳥が鳴いていた(30軒のホテルが客が来ないため閉鎖された由)し、海外からの投資が激減するなど経済的には明らかに大打撃を蒙っていた。状況はパレスチナ自治区も同じであった。

イスラエル滞在の前後に派手な無差別テロが発生し、イスラエル軍の報復をまねいていた。それでも会議は海外からの参加者が出席を見合わせるというようなこともなく予定どおりに開幕し、閉幕した。後日アメリカで発生した空前のテロをTVでみていて、イスラエルではこの種の異常事態はむしろ正常なのだと妙に納得してしまった。イスラエルでもパレスチナ地区でも50年以上の間、人々はこの状態に慣れてしまっている。この不条理な状況を見るのは悲しくてつらい。前述したように海外に親類がいる国民はとりあえず避難するであろう。しかし、それが「とりあえず」で終わりそうにない状況が切ない。

帰国後、新聞や友人からのメールで、イスラエル国内の状態はさらに悪化しているのを知った。相次ぐ爆弾を抱えた自爆テロにさすがのイスラエル国民も一段と悲観的になったようだ。テロを抑えられないアラファトの統治能力の欠如にハト派のイスラエル人の間に和平の前途に対する絶望感が漂い始めたようだ。イスラエル政府の強硬策は逆の効果を生んでいる。パレスチナ人の憎悪はさらにふくらんでいく。

ところで、テルアビブに滞在したとき偶然ある会合に招かれた。戦前ドイツやポーランドから神戸に上陸したユダヤ難民のため日本滞在ビザ延長を日本側官憲と交渉した人物に小辻節三というキリスト教を学んで神学者となり、かつヘブライ語の文法書を著した学者がいた。戦後かなりたって小辻氏は改宗してユダヤ教徒となり、遺言に従って死後エルサレムに埋葬された。小辻氏のお嬢さん2人が墓参りのためたまたまイスラエルを訪問中で、イスラエル側はユダヤ難民を救った恩人として感謝のレセプションを催し、私も招待されたのである。小辻姉妹とは以前鎌倉のお宅に伺って父節三氏の詳しい話を聞いたことがある。小辻氏はハルビンで1938年12月に開催された第2回極東ユダヤ人大会に出席し、ヘブライ語でみごとなスピーチをし、列席のユダヤ人をびっくりさせ万雷の拍手を浴びている。

リトアニアの首都カウナスでポーランドのユダヤ難民のために日本通過ビザを発給し、6000人の命を救った外交官杉原千畝氏のごことは余りにも有名だが、日本の歴史をひもとくと、杉原、小辻に限らず、世界中で迫害される人にあたたかい手を差しのべた多くの無名の日本人がいる。このことをあらためて考えることになったのは今度の旅の最大の収穫であった。

(まるやま なおき 所員・法学部教授)